# めぐるりアート静岡

まちひとときむすぶ

2017
10.17 tue
11.5 sun
ヒロバのみ10.14 SAT／11.12 SUN

千葉広一《駅前広場》2017

遠藤美香《芝生》2013

岩野勝人
千葉広一
小笠原圭吾
池島康輔
遠藤美香
奈木和彦
渡辺真也

奈木和彦《提婆達多》2017

岩野勝人
《キリン・キリン》2017

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
静岡県立美術館
静岡市美術館
中勘助文学記念館
村上開明堂七間町第２ビル

渡辺真也《哀史奄美》2017

目　次


ごあいさつ …… 03
岩野勝人 …… 04
千葉広一 …… 08
小笠原圭吾 …… 12
池島康輔 …… 16
遠藤美香 …… 20
奈木和彦 …… 24
渡辺真也 …… 28
アーティストトーク・関連イベント・ななげい …… 32
来場者の声 …… 34
成果と課題 …… 35

# めぐるりアート静岡

## まち/ひと/とき、むすぶ

2017/10.14(SAT)/11.12(SUN)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
**岩野勝人　千葉広一　小笠原圭吾**

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)
静岡県立美術館
**池島康輔**

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)
静岡市美術館
**遠藤美香**

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)
中勘助文学記念館
**奈木和彦**

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)
村上開明堂七間町第2ビル
**渡辺真也**


平成29年度 まちは劇場プロジェクト 東静岡アートプロジェクト事業
主催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団　協賛：村上開明堂
協力：オルタナティブスペース・スノドカフェ、株式会社CSA不動産

# ごあいさつ

『めぐるりアート静岡』は、今を生きるアートを紹介する市内回遊型の展覧会です。静岡大学を中心に4年前から始まり、本展で5回目となります。また昨年度から静岡市と静岡市文化振興財団が主催者に加わり、JR東静岡駅北口の広大な市有地が会場に加わりました。

展覧会の目的は、「静岡から芸術を発信する場の創出」です。会場は静岡県立美術館エントランスホールとロダン館、静岡市美術館多目的室、中勘助文学記念館・杓子庵、村上開明堂七間町第2ビル、JR東静岡駅北口の「アート＆スポーツ／ヒロバ」で、そこに7人のアーティストが作品を展開しました。「アート＆スポーツ／ヒロバ」は、人びとが集まりライブな活動を楽しむことができる、静岡市「まちは劇場」プロジェクトの超・実験的な空間です。

静岡のさまざまな地をめぐりながら同時代の多様な作品に出合うことで、見慣れた街がちょっと違って見える。場と人とアートとの間にそんな関係が生まれることを期待しました。それは、記憶をめぐる時間の旅でもあります。

「アート＆スポーツ／ヒロバ」のある場所は、かつてこの地の物流を支えた貨物駅でした。そこでは古い国鉄車掌車を利用した「車掌車ギャラリー」が「駅舎」となって時と人をむすび、40ftと12ftのコンテナを改造した秘密基地「コンテナ・アートベース」が新たにお目見え、また巨大なリンゴが設置されるなどヒロバは祝祭的な空間に変貌しました。試練としては、会期3週間のうちの2週間が長雨に祟られ、2度の週末に台風が来襲したことが挙げられます。そこで「ヒロバ」のみ、一週間の会期延長としダメージの回復に努めました。

また、小説『銀の匙』で知られる中勘助の仮寓を復元・整備した文学記念館や、かつての映画館街、七間町の空き店舗も会場になりました。七間町会場では関連企画として静岡市文化振興財団による「韓国芸能の伝統と今をむすぶ」まちかどコンサートが開催されるとともに、派生企画としてユニークなコミュニティスペース「ななげい（七間町大学藝術学部）」が出現しました。静岡県立美術館と静岡市美術館が手を携えて、静岡にゆかりのある若手のアーティストを紹介することも、本展の大きな特色です。

芸術はどこか遠くにあるのではなく、誰もが心の中に秘めている、しなやかな弾力です。多くの皆さまに、静岡の地とアートを「めぐり／めぐって」いただき、まち・ひと・とき、に新鮮なまなざしを向けていただくことを願いました。

最後になりましたが、本企画への参加を快諾し、最大限の力を発揮してくださいました作家の皆さま、後協賛いただいた株式会社村上開明堂並びにご協力いただいた各会場の関係各位に、この場をかりて篤く御礼を申し上げます。また本展の企画および準備全般にわたって、専門的な知見を惜しみなくご提供くださいましたキュレーションチームの皆さま、そしてこの新たな枠組みでのプロジェクト実現に向けてご支援下さいました、静岡市および静岡市文化振興財団の関係各位に深く感謝の意を表します。

「めぐるりアート静岡」が、若い作家に勇気を与えるとともに、私たちに新たな出会いをもたらし、地域の活力を高め、また心豊かな社会の実現に資することができれば幸いです。

2018年2月

白井嘉尚

2017/10.14(SAT)/11.12(SUN)
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

# 岩野勝人

彫刻家／京都府在住

1961年　徳島県三好郡三加茂町（現 東みよし町）生まれ
1988年　京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻 卒業
1990年　京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

2008年　「IWANO MASAHITO 現代アートによる徳島再見」（徳島県立近代美術館／徳島）
2012年　隠岐しおさい芸術祭2012「様々な作家による、隠岐・西ノ島」（島根県隠岐郡西ノ島／島根）
2014年　「Erosion/Transfiguration -侵蝕と変容の先の関係性へ-」（瑞雲庵／京都）
2016年　「めぐるりアート静岡 ～ちょっと、ざわざわ、しに行く～」（静岡市美術館／静岡）
2016年　「めぐるりアート静岡 ～記憶をめぐる 記憶をつくる～」（東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ／静岡）

「めぐるりアート静岡」では、彫刻家の岩野勝人さんに、第3回で座れる人型の彫刻「メンタル・チェア」を静岡市美術館で展示して頂いた。そしてここ「アート＆スポーツ／ヒロバ」が会場に加わった昨年秋の第4回でも、再び「メンタル・チェア」を奥の芝地に設置してもらった。鉄筋を無数に曲げて溶接した真赤な人型の“イス”は、秋空の芝地の木陰で伸び伸びと、子どもたちの人気の的になった。

同時に岩野さんにはヒロバについて一緒に考えて貰った。静岡市は「まちは劇場プロジェクト」の一環として、殺風景だった広大な市有地をアートとスポーツで「人が集まりライブな活動が起こるサードプレース」にするという。めぐるりもその「超・実験的な空間」作りに協力することになったのである。

そこで岩野さんが提案してくれたのが、コンテナを使ったアートの秘密基地「コンテナ・アートベース」である。ヒロバがもともと、旧国鉄の貨物の操車場だったという土地の遠い記憶に根差しながら、アートを通じてそこにいろんな人が関わるベースを作りたい。貨物コンテナを使って、アトリエ機能も持った秘密基地を作る――

もちろん岩野さんは彫刻家である。それも鉄を得意とする。コンテナは鉄で出来ている。溶接機など本格的な工具を持ち込み、コンテナそれ自体を“鉄の彫刻”として、現場で制作する。その姿は「アートベース」の目指すところを自ら示すだろうし、単に作品を設置するだけではない、進行形のプレイスメイキングな試みこそ、街の中の「大切な第３の場所」作りに相応しい。そう、まだ見ぬ理念、理想にカタチを与える力こそ、現代のアートに期待されている役割りであり、なればこそ功罪は別として近年各地で芸術祭が目白押しなのである。

「めぐるりアート」のヒロバでの試みも、ささやかだが、アートに対するそんな過剰ともいえる期待に応えようとするものである。そして「アートベース」は、彫刻は社会の中で役に立たないものと見定めて、それでもそんな彫刻に人生をかけようとする彫刻家と彫刻が、社会の中でどんな存在でいられるのか、考え、実践し続けてきた岩野さんだからこその力業である。その活動自体が、岩野さんが考える社会の中での“彫刻”の姿なのである。

以倉新（静岡市美術館学芸課長）



アーティスト・インタビュー

# 「使われてなんぼ」の空間創作

## ヒロバをアートの発信源、秘密基地に

めぐるりアートでは、僕のライフワークである人型の座れる彫刻「メンタル・チェア」を、静岡のみなさまに見てもらえる機会を3年前からいただいて感謝しています。さらに、ヒロバには、コンテナを使った“アートの秘密基地”を提案させて頂きましたが、とても実験的な試みで、これからどうなるかワクワクしています。

ヒロバは完成した作品を持ってきて展示するより、ここで作品をつくり発信していく場になればと思いました。今年の5月には先行して40フィートのコンテナを設置し、地元大学生と一緒にコンテナの壁面をペイントするワークショップを行いました。今朝、久しぶりにヒロバに来ると、高校生が２人その前で写真を撮っていて、聞くと誰かがSNSに投稿した写真を見て、壁画の場所を探してやって来たと。すでに、ここがアートスポットとして発信源の機能を持ち始めています。今後もワクワクドキドキする、アートによる試みや仕掛け、様々な魅力を付加していきたい。そして、いろんな人が集まり、発信していくような、アートとの出会いの場を創出したいと思っています。

## ヒロバというサバンナに立つ5mのキリン

ヒロバには、シンボルとして5m40cmの高さのある等身大のキリンを立ち上げます。広いヒロバの芝生をサバンナに見立て、“キリンがいい！”と思いました。存在感のある高さ、さらにキリンのシルエットとコンテナの素材との相性も抜群です。材料は新しく揃えるのではなく、コンテナを改造した時に溶断した壁材などを有効活用しています。太陽の動きで芝生の上にキリンの影が10m、20mと長く伸びるのも幻想的かなと。

2つのコンテナの内外もそれぞれ改造し、アトリエやギャラリーなど、誰もが使いたくなる様な場を作ります。さらに、この場所が昔、貨物駅として静岡の物流の拠点だった時代のイメージをまとったレトロ・フューチャーな空間も造作する予定です。会期中には、壁面を溶断して窓を開けたり、大扉を作ったり、公開制作で行いますので、是非、見に来てください。

今後は、コンテナの壁面をバックに芝地に椅子を並べて、パフォーマンスや音楽ライブがあってもいい。大きな黒板も作る予定で、木工ワークショップで椅子や机を作って、完成したら大学の先生に来てもらって、美術に限らず、専門的な講義をここでしてもらう。普段大学の教室では“むつかしい”内容も、ここで聞けば理解できるかもしれない…などと、夢は広がります。

## 彫刻サミットなどへの展開も

「使われてなんぼ」それが、「ヒロバ」の意味であり、「空間」の意味だと思っています。単なる物理的な空間ではなくて、この場所をどう共有し、広げていけるかがヒロバの持つ大きな可能性であり魅力です。それを市民の皆さんと一緒に創っていきたい。そもそも僕のつくっている彫刻作品「メンタル・チェア」は、「イス」なんです。イスだから、触っても、座ってもいいし、使われて壊れたら本望。「使われてなんぼ」だと思っています。だから、今回のヒロバへの様々なアプローチも、作品として、彫刻として、コミュニケーションする場を創出する活動と捉えています。最終目標は、ここに集う市民の皆さんとの交流と共生なんです。

コンテナをスタジオ、工房としても活用したい。しかし、「アートはこんなに素晴らしいんです」と理屈で説明しても、それはある意味こちらの身勝手です。面白いと感じてもらえなければ広がりません。そのためにも、野外の公園で、モノ作りを最低限の準備や道具で実施しましたではダメ。お金をかけてということではなく、中古でよいのでちゃんと溶接も溶断もできる本格的な工具が備わっていることが重要。そこに本物の彫刻家が集まり、制作する場に出来ればとの思いがあります。そんな作家の姿や作品を見て、地元の人がどう感じるか。ごまかしの効かない真剣勝負から、何かが生まれるはずです。

早期に勝手に「彫刻家サミット」がやれたらと妄想しています。腕に覚えのある２、3人の彫刻家がここ「コンテナ アート ベース」に集結し、真剣に作り、語り合う。普段、役に立たないと思われているであろう彫刻。それでも、そんな彫刻に人生をかけようとする作家がいる。作家にとっても地域の人と語り合い手応えを得られれば、大きな励みになります。ヒロバがそんな場所になっていけば素晴らしいと思います。

2017/10.14(sat)/11.12(sun)

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

# 岩野勝人

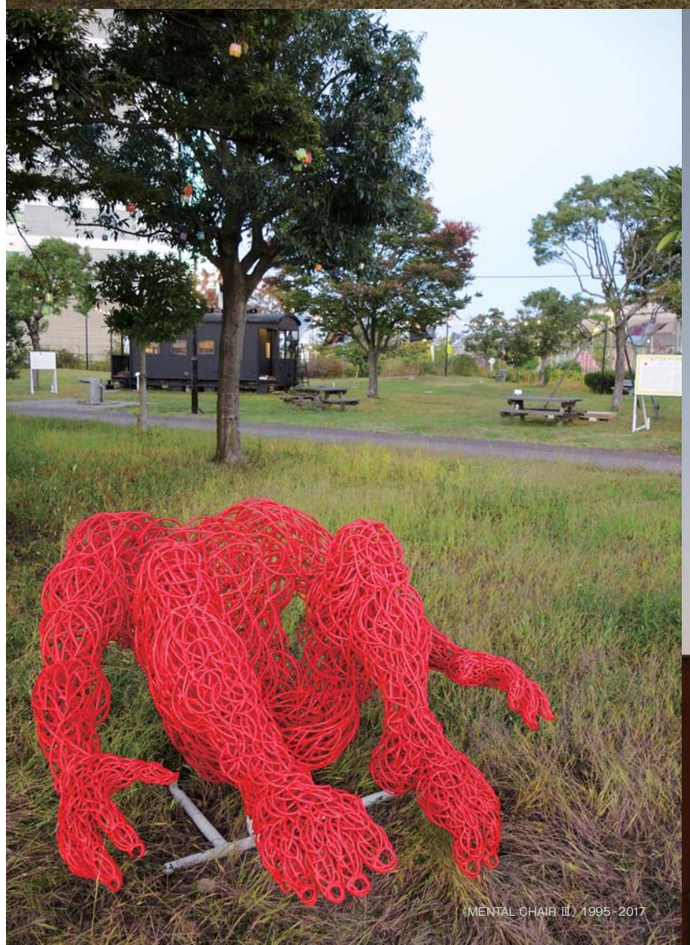
彫刻家・岩野勝人の“アートの秘密基地”「コンテナ・アートベース」プロジェクトが、いよいよスタート。5月には40ftの貨物コンテナが設置され、静岡大学と常葉大学の学生のみなさんにより、コンテナ壁面に色を塗る公開制作を実施。秋には、12ftコンテナが搬入され、アートベースのシンボル、高さ5mのキリンも姿をあらわした。昨年ヒロバ奥の芝地に設置された「メンタル・チェア」も、秋にはコンテナそばに移され、来年は“秘密基地”として本格的に稼働を始める。

40ftコンテナ搬入（4/25）

静岡大学、常葉大学学生による公開制作（5/13）

キリン制作と、ワークショップ「キリンの模様をつけよう！」（10/15）

《コンテナ・アートベース》2017



《MENTAL CHAIR Ⅲ》1995-2017

《キリン・キリン》2017

2017/10.14(SAT)/11.12(SUN)

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

# 千葉広一

美術家／静岡市在住

1967年　埼玉県浦和市（現さいたま市）生まれ
1992年　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻 卒業

2012年　個展「いつか・どこか・きっと」（ギャラリーsensenci／静岡）
2012年　「MAX A5 2012」（KONTORS Galleri／デンマーク）
2013年　「写真新世紀2013」佳作（東京都写真美術館／東京）
2014年～2016年　静岡新聞日曜版に詩人平田俊子のエッセイ挿画として作品連載（全88回）
2016年　「めぐるりアート静岡 ～記憶をめぐる 記憶をつくる～」（旧マッケンジー住宅、東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ／静岡）

## 東静岡駅東駅／こころの結び目

昨年の「めぐるりアート静岡」では、「記憶をめぐる 記憶をつくる」というテーマが掲げられ、千葉広一に二つの会場が委ねられた。一つは、海辺の文化財建築、W.M.ヴォーリズ設計による旧マッケンジー住宅である。そこでは、静岡の茶産業発展と社会福祉に大きな貢献をした、マッケンジー夫妻の暮らしと足跡を偲ぶことができる。千葉は二人の記憶に寄りそうように自らの記憶を重ねた。もう一つは東静岡駅北口の「アート＆スポーツ／ヒロバ」である。かつて国鉄貨物駅があった場所。彼はそこに自身が所有する国鉄時代の車掌車を移設、ギャラリーとすることで、場の記憶を蘇生させ更新した。

ところで千葉の作品は優しさが特徴といえようか。そこには私たちのさりげない心の動きが、控えめに、しかし鮮やかに提示されている。小さな素描をノートから切り抜き、日常にからませ、カメラで写し言葉を重ねる。

意外にも千葉にとって表現の原点は、生きづらさであったという。10代の終わりころ、油絵を描きながら常に、画面を黒く塗りつぶす衝動につきまとわれていたそうだ。藝大入学後、気持ちは絵から離れ山に向かう。嶮しく美しく崇高で、生と死が境を接する非日常に身をおいた。その後、美術教員として静岡に転居し創作活動からさらに遠ざかる。一方で建物への興味が芽生え、戦前期の屋敷に仮寓した後、古い車掌車を入手。水見色の林間に設置して7年ものあいだ住まいにしたという。

20代から30代にかけて息をひそめていた「絵を描きたい」という内なる声が、固有の記憶をまとう家や車掌車での暮らし、そして身近な自然の豊かさや生徒との交流を通し、しだいに確かなものになっていった。千葉が、「本当に表したかったもの」とは何だろう。それは誰もが時の流れのなかにあり、日々さまざまな思いをいだき生きているという、平凡な、しかし、かけがえのない生のありようではないだろうか。

今年の会場は車掌車とその周囲の小さな緑地のみである。そしてそこに、《東静岡駅東駅》を仮設する。「駅」そして「駅前広場」、人が旅立ち・行き交い・出会い・別れるところ、それは心の結び目に他ならない。この「駅」を訪れ、通り過ぎる人の心には、今年の「めぐるり」のテーマ、それぞれの「まち ひと とき、むすぶ」が想起されることだろう。私たちは、どこから来たのか。何ものか。そしてどこへ行くのか。

白井嘉尚（静岡大学教授）



アーティスト・インタビュー

# 人の想いの始発「駅」

## 場の記憶と向き合う

昨年、めぐるりアートに初参加し、旧マッケンジー住宅とヒロバで展示を行いました。建築としての魅力に惹かれ、その空間で展示できることの喜びを感じたのが旧マッケンジー住宅。何度も足を運び、時間を過ごして、その空間の広さを有効に使うための構想を練り、展示してからも新しいものを増やしていきました。

その一つが、インスタントフィルムです。自分の想いとマッケンジー氏の想いを重ねるには、ふさわしい表現方法でした。そのために埼玉の実家に帰り、子どもの頃過ごした場所を探し、夏毎に訪れていた九十九里の海に向かい、写真を撮ってことばを紡いでいきました。自分の中では、旧マッケンジー住宅の展示に関しては、場の記憶、土地の記憶、歴史に私の作品が寄り添うことができたという実感があります。

一方ヒロバの方は、移設した車掌車と旧国鉄の貨物基地であった場の記憶は繋がったものの、作品展示とはおおよそ無縁と思われる広大な場を取り込んでの展示という点では、まだまだ表現の可能性を残すものとなりました。今回は、その部分も含め、改めて挑戦することにしました。

## 今年のテーマは、過ごしてみたい「駅」

ヒロバにある車掌車は、私が以前住居として使っていたものです。昨年、山に置いてあったものを持って来て、高校の教え子たちといっしょに砂利を運び、ブロックを積んで基礎からつくりあげました。普段の作品制作は一人の作業であり、生徒たちと関わりながら作品ができる喜びは得難いものでした。

今年は、「駅」というテーマで空間を創作します。2012年、生徒たちと「青い屋根のバス停」を作り、2016年にも課外授業として冬山に２棟の小屋を建てました。この車掌車も2016年に生徒と再生したものです。一人ではできない、人と関わりながら思い描いたものを出現させる、写真とは別の表現としての「駅」です。

車掌車自体が駅であり、駅舎であり、待合室であり、客車になります。そして、前回は北斗七星が浮かんでいた緑地を「駅前広場」にしました。車掌車の外に電飾をツリー状に吊り下げ、2.4×1.8mの写真を10数枚展示する予定です。新作も含め、日々撮りためたものの中から会場に合うものをセレクトします。写真を大きくしても、野外で展示すると存在感を出すのが難しいのですが、インスタレーションとしての表現を試みます。

写真をプリントするのは、布のような光が透ける素材です。日の光、電飾の明かり透かすことで、夜と昼では雰囲気が変わるため、そこも楽しんでもらえたらと思います。（※雨天時、強風時、夜間は外します。）

## 想像力をかきたてる、心地よい空間に

目指すのは、居心地のいい空間です。それは、誰もが心の片隅にあり、懐かしさを感じられる場所。自分の中にある穏やかな情景をイメージしてつくっていきます。

私が子どもの頃、駅に行くのは賑やかな街に行くことでした。駅をイメージすると、親に連れられて出かけたときを思い出し、デパートの屋上にあった遊具や金魚などが記憶の底から浮かび上がってきます。そんな、人それぞれの「駅」をここで過ごすことで、想像してもらえればと思います。

駅は、出発の場所であり、立ち止り、佇み、出会い、別れ、帰ってくる場所でもあります。昨年のテーマである「何処へ」を引き受ける形でいうと、今年は「旅立ちの駅」になるかと思っています。

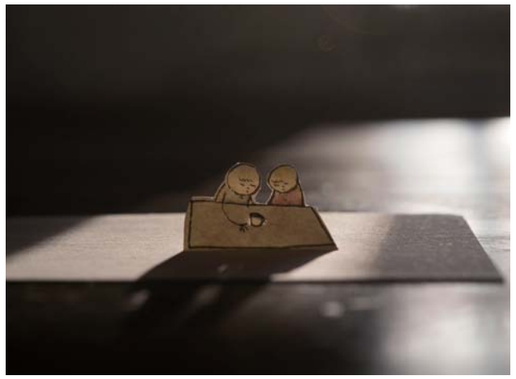
《駅前広場》2017

2017/10.14(土)/11.12(日)

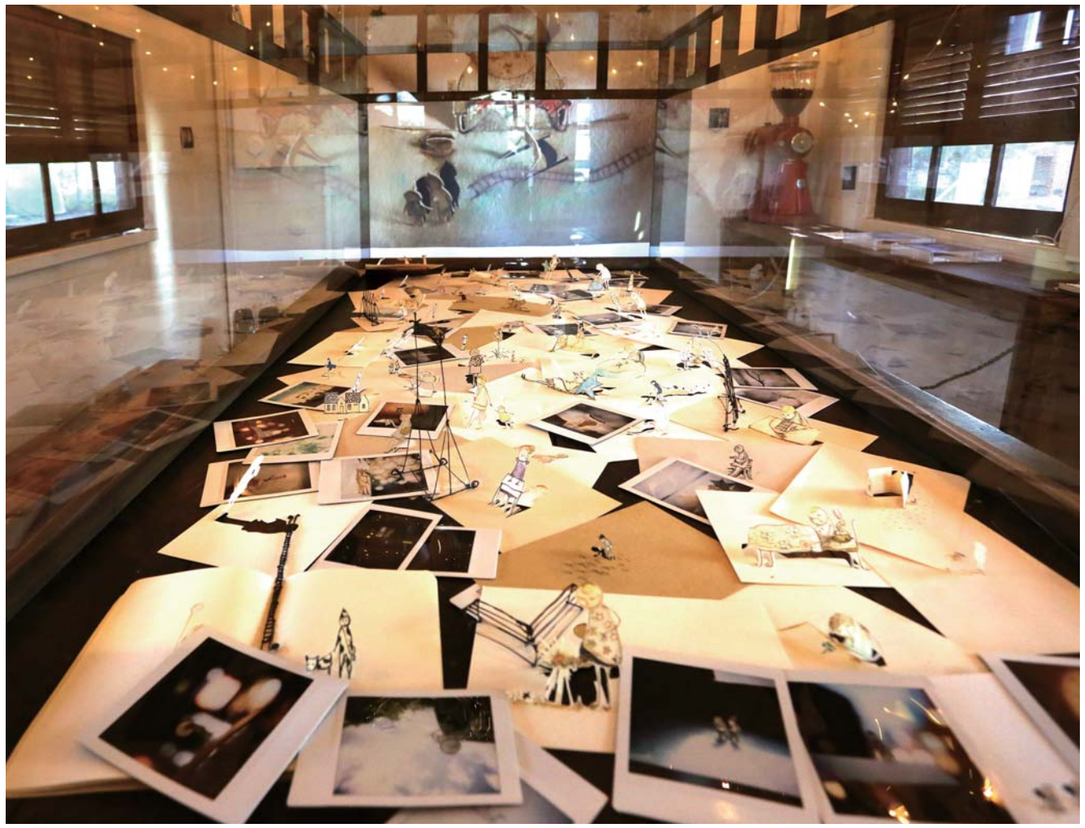
東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

# 千葉広一

ヒロバの車掌車は「駅」に停車中の車両であるとともに「駅舎」でもあります。周囲の「駅前広場」には布にプリントされた大きな写真がはためいています。駅舎にある「待合室」は、夜9時までオープン。灯る光に誘われ毎夜様々な人が立ち寄りました。そこでは展示されている作品もあいまって、時は、過去に向かってゆったりと流れていたのでは、、、。人びとは、そんな「待合室」でしばし時を過ごし、それぞれに家路につきました。



《珈琲》2017



車掌車ギャラリー内展示風景

2017/10.14(SAT)/11.12(SUN)

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

# 小笠原圭吾

美術家／埼玉県在住

1985年　浜松市生まれ
2009年　東京造形大学 美術学科 彫刻専攻 卒業

2014年　個展「pop dot project」(3331 Arts Chiyoda／東京)
2015年　TRANS ARTS TOKYO 2015(五十一八通り／東京)
2016年　EAT! "Enjoy Art and Table"(表参道スパイラル／東京)
2017年　POP DOT APPLE(ビクトリアポリテクニック大学／メルボルン)

## 鮮やかなつながり

小笠原圭吾の《pop dot project》は、作家によって精緻につくられた陶の「りんご」と、これを受け取った参加者のささやかな行為によって大きな物語を紡ぐ。

大学でアカデミックな人体彫刻と向き合ってきた彼は、卒業後に制作を続ける難しさと直面するなかで、アシスタントをしていたアーティストの影響もあり、作品を通して人や社会と繋がりたいという想いが強くなったと言う。こうした背景を持つ本プロジェクトは、彫刻作品である「りんご」があなたの生活に寄り添い、共に旅をしながら空間を拡張してゆくインスタレーションであり、始まりも終わりもない地球をキャンバスに見立てたドット柄の絵画でもある。そして、個々人の視点によって切り取られた「りんご」のある風景は、現代の情報ツールを介して集約・公開され、多様化する社会の輪郭を浮かび上がらせる。

日常と社会の関係性と対峙し、あらゆるボーダーを超えてゆく取り組みは、90年代以降のグローバリゼーションの台頭によって興隆した「リレーショナルアート」を想起させ、西洋において特別な意味を持つ林檎の記号性は、人類の長い歴史によって育まれた食や芸術など、世界の文化的な繋がりを改めて考えさせてくれるだろう。

今回の展示は誰もが自由に鑑賞できるアート＆スポーツ/ヒロバの性質を活かして展開されている。また、会場の木々に飾られた沢山の「りんご」は、静岡大学地域創造学環の学生とワークショップの参加者による作品だ。

鮮やかな「りんご」をめぐって、東静岡から新たな物語が始まることを期待している。

名倉達了(静岡大学助教)



アーティスト・インタビュー

# 人と社会を「りんご」でつなげる

## りんごのドット柄を世界に広めるインスタレーション

「pop dot project」を2011年からはじめています。これは、陶器のりんごをドットに見立て、そのドット柄を世界に広めるインスタレーション作品です。陶器のりんごを数多く制作し、ギャラリーなどの展示会などで配ります。受け取った人が、普段の生活や旅先でりんごの写真を撮り、#(ハッシュ)タグをつけてツイッターで発信したり、作者にメールで送ることで参加ができます。

一個ではただのドットでも、それが増えることで柄になり、人とのつながりを表現することができます。参加者の行為を作品のひとつとして構成することで、ドット柄は意志を持つのです。陶器のりんごにはシリアルナンバーがついていて、ひとつのりんごの展開を追う面白さもあります。

何年も定期的に画像を送ってくれる人や海外からの投稿も少なくありません。陶器のりんごが、日本に来ていたオーストラリアの大学教授から学生たちにわたり、学生たちが海の向こうから写真を送ってくれています。ウクライナからも画像が届いたり、「pop dot project」は世界にも広がっていて、現在も継続中です。

## 人とのつながり、関わりをアートで

6年前にフリーターをしていた時期に得た経験が、「pop dot project」の性格に影響を与えていると考えています。その時期、就活をしていましたがうまくいかず、社会との接点もなかなか見つけられない状況でしたが、その反面働くなどして社会に関わりたいという気持ちは強くなっていきました。

その期間に知り合いのアーティストの展示を手伝うこともあり、その方の作品に対する姿勢など、そこで受けた刺激にも強く影響を受けていると思っています。また、「多様化する社会」という言葉をテレビやネットのニュースで認識していましたが、そもそも多様化している社会に、人々が気付く余裕や豊かさが出てきたのではないでしょうか。いきなり大きな単位の社会との関係を探すのではなく、個人が集まって社会がつくられていると考え、多くの個人と関わり、そこに社会の輪郭を見ようとしています。

りんごを選んだ理由は、一般家庭の食卓にもあり、美術や神話、企業のロゴのモチーフにもなっている身近な存在だから。身近な存在であれば、先入観で本物に見える偶然から、持ち帰られた先で知り合いなどに「実は陶器でできている」といった驚きを生み、コミュニケーションのツールにもなってくれるかもしれません。また、人類の発展に食料として寄り添いながら生息の範囲を広めたりんごは、たくさんの人が展示会場からそれぞれの日常へと持ち込める魅力がある存在としても捉えています。

## ヒロバからりんごがつぶやきはじめる

めぐるりアートでは、「アート＆スポーツ／ヒロバ」が展示会場です。もちろん、陶器のりんごが登場します。コンテナの中に500個ほどのりんごをならべ、プロジェクトの説明をした上で配ります。りんごの数をここまで増やしたことはないし、私が常駐できないのでその不安もありますが、自分が不在なときにどんな現象が起きるのか楽しみにしています。

そして、屋外には２m位の皮むきりんごのオブジェを設置。発砲スチロールを削り、樹脂でコーティングして仕上げた作品です。広い空間なので、遠くから観た際に、一つのシンボルとして機能することを目的としています。りんごの皮を模したターポリン(横断幕)に、これまでに投稿された画像と文章も展示しますのでご覧ください。

地元の静岡県でりんごを配ることははじめてではないのですが、昔の仲間と再びつながるかもしれませんし、地元で新しいつながりができることも楽しみです。

《pop dot project》2011～

2017/10.14(土)/11.12(日)

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

# 小笠原圭吾

ヒロバの芝生広場とコンテナ・アートベースの特性を活かし、新たな展開を見せた「pop dot project」。会場のアイコンとなった大きな「りんご」とこれまでのプロジェクトの記録をめぐりコンテナへ。会期中は天候に悩まされたが、来場者によって東静岡から旅立った沢山の「りんご」は、今も新たな物語を紡いでいる。

《小さなりんごのドット柄》2015～

2017/10.17(tue)/11.5(sun)

静岡県立美術館

# 池島康輔

彫刻家／浜松市在住

1983年　浜松市生まれ
2008年　多摩美術大学美術学部彫刻学科 卒業
2010年　東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

2012年　個展「因縁」（成山画廊／東京）
2014年　個展「泡沫夢幻」（成山画廊／東京）
2016年　「彫刻―気概と意外」（東京藝術大学大学美術館陳列館／東京）
2016年　個展「Cerasus」（成山画廊／東京）

## 西欧的人体解釈と、「彫り物」のハイブリディティ

県立美術館では、浜松在住の彫刻家、池島康輔を選び、エントランスと、ロダン館に、木彫７点を展示した。池島の木彫は、西洋由来の人体解釈と日本の伝統的な「彫り物」の技を掛け合わせた、ハイブリッドな魅力を備えている。展覧会では、池島作品の特徴を浮き上がらせることを目的に、館内の複数の空間に作品を展示した。

エントランスホールに設置した、若い男性の裸体像《メメント・モリ》は、池島が、大学院の修了作品として発表した作品である。均整が取れた、若く美しい肉体が、「自分が必ず死ぬことを忘れるな」という趣旨のタイトルと響き合い、生命感が際立っている。手足が長く、細身の男性像は、体重を右脚にかけ、反対の脚を後ろに振り上げ、重力を感じさせず軽やかに立っている。頭頂から背中、尻にかけてのラインがS字カーブを描き、ダイナミックなねじりを効かせている。池島は、この像を、平安時代前期の仏像彫刻に良くみられる、頭部と体幹部を一つの木材から彫り出す一木造りの技を用いて表している。西洋古典に由来するポーズを、日本の伝統的な木彫の技を駆使して作り出している点が、本作の大きな特徴といえるだろう。足元の台座に表された唐草模様は、後期ゴシック時代の木彫の巨匠リーメンシュナイダーの祭壇彫刻から引用したもので、美術史を遡っての木彫表現の探求の跡がうかがえる。

ロダン館に展示した女性像《月喰》は、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたとされる《レダと白鳥》のレダのポーズを想起させ、ここからも、作家の西洋古典に倣う態度を読みとることができる。本展では、《月喰》を、ロダンの《永遠の休息の精》の隣に並ぶように設置した。足を交差し、左足にほとんど体重をかけて、極めて危うい均衡のもとに立つロダンのブロンズ作品と見比べた時、鑑賞者は、ロダンの斬新な表現に改めて気づかされる一方で、両作品の表面の仕上げの違いに気が付いた事だろう。ロダンは、モデリングの段階で、荒く付けられた粘土の形を、そのままブロンズに鋳造し、大胆にも表面に残しているのに対し、《月喰》の女性像の木肌は、実に細やかである。仏像を彷彿とさせる表面は、鑿だけで刻み出しており、ここからは、作者の意識が、表面の隅々に宿っていることに気が付く。女性像の右腕に留まるフクロウには「彫り物」の学習の成果が見事に表れている。

西欧的な人体解釈を徹底して学んだ池島が、日本の木彫の系譜に、自己の表現を接続させたいという思いを募らせ、「彫り物」に興味を示すようになったのは、大学卒業後のことである。幼少の頃から生活の中で目にしてきた、地元笠井町の春日神社の建築装飾や、遠州地方の祭りの屋台彫刻の魅力を再発見した池島は、その技を職人との個人的な交流や独学により身につけてきた。名品コーナー左には、近年、池島が手がけた遠州地方の祭りの屋台彫刻から、「正面御簾脇」と「正面脇障子」を、中央にはイノシシの小型像《瞼（けん）》を、左には、タコを表した《戝陋（せんろう）》を展示した。イノシシのヒズメや毛並みは写実的で、細工の細かさや作品サイズからは、床の間の置物を想起させる。《戝陋（せんろう）》の血管が浮き出た肉感的な体や、吸盤は本物のタコのようである。いずれも木彫の表現の独自の探求の成果が活きている。

川谷承子（静岡県立美術館 上席学芸員）



アーティスト・インタビュー

# 木彫の延長線上に立つ

## 祭りの屋台の飾りが彫刻につながる

僕は芸術系の高校に通っていました。2年生のときに専攻を油絵にするか、彫刻にするか迷って、選んだのが彫刻。美大で彫刻科に入り、ひと通りの素材を扱う中で自分の中で木彫が腑に落ちました。同時に、地元の祭りに登場する屋台の彫り物を子どもの頃からずっと見ていて、アカデミックな分野ではそうした屋台や社寺建築に取り付けられている彫り物が、彫刻の系譜として扱われないことに対するジレンマを感じていました。

大学の頃のモチーフは人体が多かったです。自分が人間だからこそ、表に出てこない内面的な感情を残したいと。素材の木も元々地面に生えていたものが切り取られ、そこから新しい作品が生まれる。それが生々しくて、人体的解釈の興味、解釈、フォルムの魅力や面白さもあり取り組んでいました。

もちろん、ロダンの影響も受けました。ロダンの作品は写実的な見え方もしますが、自分のカタチにしている凄さがあります。ポーズ、全体のねじれに感情がにじみ出ていて、それがモデルの人となりなのか、ロダンの感情なのか…。自分も作品に感情を表現したいと強く意識をしています。

## 生命の意味、そして「拳禅一如」

芸大大学院の修了制作は、「メメント・モリ」（死を想え）というタイトルです。人間の持っている命のはかなさ、危うさ、繊細な内面性を出したかった。そして、人体のねじれ、木取りの複雑さ、当時の自分の技量の最高のものをつくろうと、全体構造に凝りました。浮遊感、重力を感じさせないことで、存在のはかなさを表現しています。

大学院を出てからは、動物や動物と人間の合体などもモチーフにしています。動物の場合、意味合いやイメージが大事です。例えば、ハイエナは死体を食べて生きる。生物の連鎖、輪廻が制作する上で、グロテスクも含めて生命表現が面白かったので、「死肉貪獣」を作品にしました。今でも、自分が何で生きているのかを考えて制作をしています。

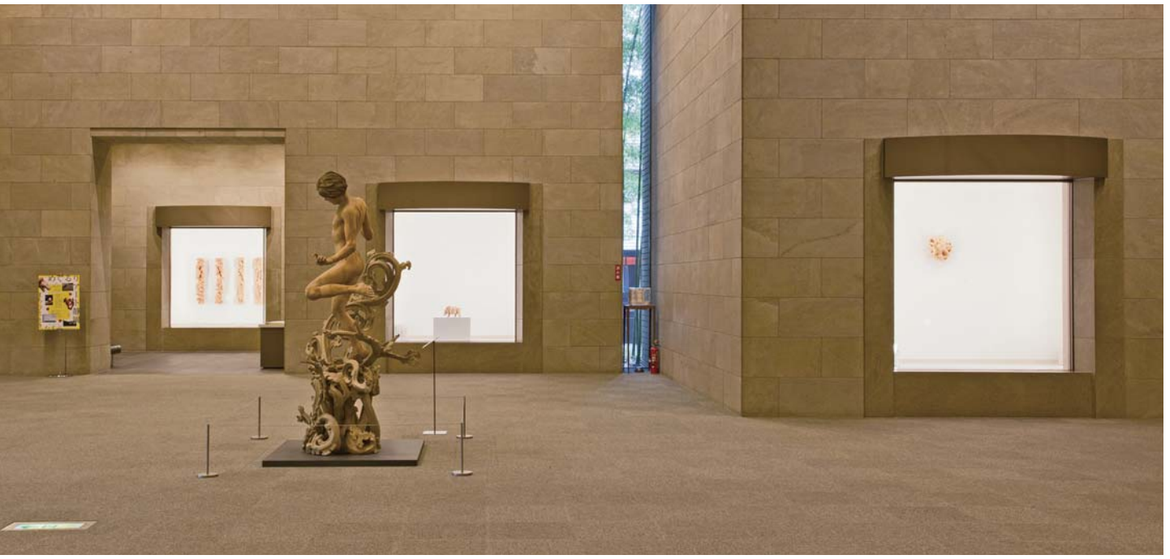
「ダーマ」（達磨大師）シリーズは、高校時代まで取り組んだ少林寺拳法がきっかけです。ダーマとは、サンスクリット語で、「法」「宇宙」「秩序」といった意味合いがあり、「達磨」の語源であるとも言われます。達磨の考え方は少林寺拳法の基本理念の元になっていて、その中の一つに「拳禅一如」の教えがあります。肉体（拳）と精神（禅）を同時に鍛えなくてはいけない。それをダーマのカタチにすることで表現し、西洋的な人体解釈に日本の伝統的な木彫の技術を取り入れながら完成させました。

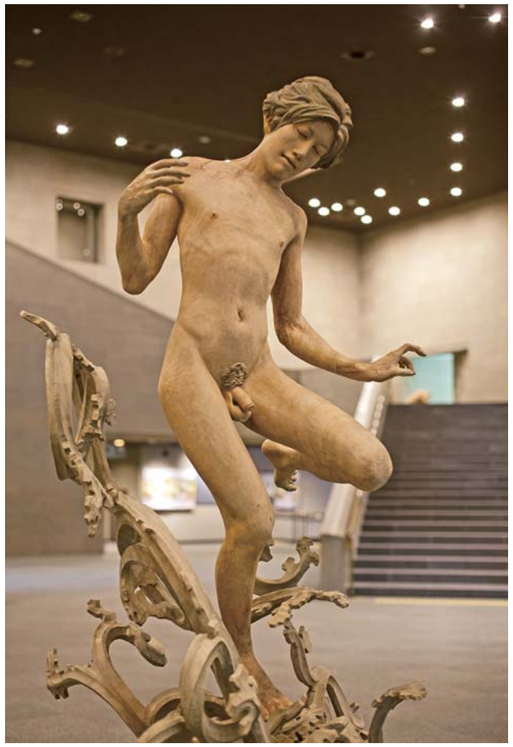
## 伝統的な木彫技術、職人気質を作品の中に

めぐるりアートでは、ロダン館のある県立美術館が展示会場になるので、ロダンの文脈と僕が今制作している日本の木彫としての文脈の対比をしようと思います。明治維新により近代彫刻がスタートし、ロダニズムが入ってきたことで日本彫刻は大きく動きました。日本では、それまで仏像や彫り物などをつくる職人の時代がつづいてきましたが、ロダンの技術がそれ以降の彫刻の価値観を限定してしまい、日本のアカデミックな分野では木彫が廃れていきました。

そんな時代背景とともに、伝統的な木彫の技術、日本の職人気質みたいな考えがあることを作品を通して伝えたい。この機会を与えられたとき、明治以降に置き忘れられたような木彫の文脈に自分自身を置いて、しっかりロダンと対比してみたいと思いました。

前述した作品を含め8作品をエントランス、ロダン館等で展示します。近代の新しい彫刻の流れを自分の中でどう咀嚼し、日本の伝統的な要素を加えて作り上げているか。ロダン作品と比べてして、ご覧ください。





《メメント・モリ》2010

《死肉貪獣》2014

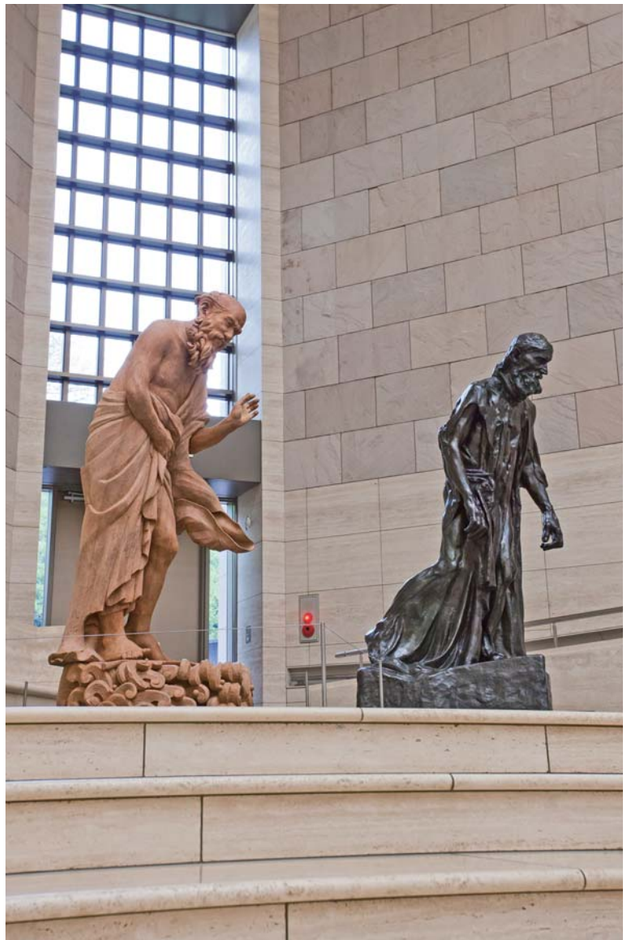
2017/10.17(Tue)/11.5(Sun)

静岡県立美術館

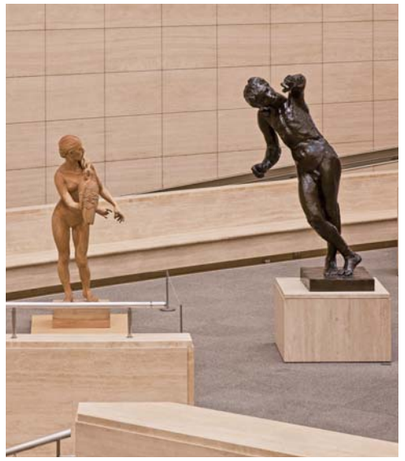
# 池島康輔

エントランスホールには、特徴的な台座のついた若い男性の裸体像《メメント・モリ》を、また名品コーナーには、近年、池島が手がけた遠州地方の祭りの屋台彫刻から、「正面御簾脇」と「正面脇障子」ほか、置物を思わせる小型の木彫2点を展示した。階段の踊り場には、作家が生命の循環に想いを巡らし制作した《死肉貪獣(ハイエナ)》を、ロダン館には、ロダンの3つのブロンズ作品と対比させるように、大型の人体彫刻3点を展示した。

《木花咲耶姫》2016



《ダーマ》2010



《月喰》2014

2017/10.17(Tue)/11.5(Sun)

静岡市美術館

# 遠藤美香

版画家／浜松市在住

1984年　浜松市生まれ
2007年　日本大学芸術学部美術学科版画専攻 卒業
2009年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画・版画領域 修了

2009年　第1回青木繁記念大賞西日本美術展 石橋財団石橋美術館賞（石橋美術館／久留米）
2011年　シェル美術賞2011 本江邦夫審査員奨励賞（ヒルサイドフォーラム／東京）
2014年　第2回国際木版画会議 特別企画展「木版ぞめき-日本でなにが起こったか-」（東京藝術大学大学美術館／東京）
2016年　FACE展2016 損保ジャパン日本興亜美術賞展 グランプリ（東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館／東京）

遠藤美香は、等身大を超えるベニヤ板をひたすら彫刻刀で彫り、墨一色で刷り上げた大きな木版画を制作している。別に仕事もしていて、その手数の多い画面は、一作彫りあげるのに2、3か月から半年もかかる。描く対象を写真に撮り組み合わせて下絵を作っている。画面に多く登場する女性の姿は、作家本人とおぼしいが、そのことに特に意味はないという。自分が一番手近かだという理由で、自分で自分の写真を撮り、素材として使っている。遠藤は、「自分の感情や嗜好を絵に持ち込みたくない」「見る人に委ねて作品世界が広がればいい」と繰り返し語っている。だから、感情を喚起しやすい顔は描かれず、うつむいていたり、後ろ姿だったりすることが多い。

遠藤は自分には作品で表現したい「コンセプト」がないのだという。奇を衒っているのではない。ごく控えめにそう言う。大学に入った当時、「コンセプト」に基づいて制作を行う同級生がたくさんいて驚いたこと、自分は「絵はシンプルに“ただ描くもの”だと思って」いて「同級生たちは本当にすごいと思った」、「私は‥有意義な経験をせずに生きてきてしまったので、自分を通して表現できるものがない」のだと過去に率直に語っている。

構図を決めて下絵を板に写してしまえば、あとはひたすら彫ることに没頭できる木版画は、だから作家の愛するところなのである。毎年、どこかのコンクールや公募展に出すことを目標に、日々こつこつと制作を続け入賞を重ねてきた。

確かに作品のテーマやコンセプトは、西欧近代の「美術」では大切にされる。特に現代ではコンセプトが声高に語られる。しかし、本当に皆、語るに足るコンセプトなど持ち合わせているのだろうか。

形と構成のためなら、描くものは富士山でもスカイツリーでもよい。その方が分かりやすくもあるだろう。しかし、遠藤の画面には、庭の片隅や昔ながらの畳の間など、恐らくは作者に身近な場所が近接的に描かれる。白と黒で単純化され、構成された、どちらかというとがらんとした空間に、何をするでもない、しかし判然とした女性の姿が描かれる。

明示的な物語のないその世界には、しかし何かが行き渡っている。それは、自分には大した経験もなく、だから表現すべきコンセプトもないのだという作家の、自分を見つめる透徹した眼差しではないだろうか。自身の生活を一歩下がって見つめる静かな眼差しを、大画面をこつこつと彫りあげる版の力が支えている。声高に語られないが故に、届くものがある。作者も気づかない程に、一途に彫る日々の生活から滲み出るものがあって、それが見るものの心をざわつかせる。

以倉新（静岡市美術館 学芸課長）



アーティスト・インタビュー

# 「身近」を削り、描く

## シンプルでわかりやすい木版画が自分らしい

大学2年まで油絵を、3年から版画を専攻しました。版画を選んだのは、表現手法の部分で新しい知識を得られると思ったから。版画専攻の指導教授が厳しかったこともあり、とにかく課題が多く、大いに鍛えていただきました。1年がかりで作成した馬棟（ばれん：版画をするときに圧をかける道具）は、現在の制作になくてはならない道具です。

私は木版だけしかやりません。リトグラフ、銅板だと薬品を扱うため、創作以外に神経を使うことになるからです。その点で、単純明快な技法の木版画に惹かれ選択しました。黒一色で表現するのも、同じ理由です。多色刷りは色によって版をわけたり、効果をかんがみて摺る順番を計画したりと、細かな采配が必要になります。段取りを整えて作業することができない元来の性分のため、多色刷りをやろうという気持ちがおきません。

使用素材も特別なものではなく、大学のときから変わらずベニヤ板です。ホームセンターで売っているようなベニヤ板で、作品の大きさも必然的にそのサイズになります。描く対象物を沢山、撮影し、その写真を組み合わせて下絵を作ります。下絵を見ながら板に描き写してしまえば、その絵をひたすら彫っていきます。別の仕事をしているので、平日は早朝に起きてから出勤までが創作の時間です。大きい作品になると、仕上がるまでに半年くらいかかります。

## 見た人の感想、印象が作品そのもの

題材に関しては、とくにこだわりはありません。強いて言うなら、身近にあるもの。女性をテーマにしている印象を受けるかもしれませんが、それは自分が最も身近な存在だったから。目鼻を描くといった細かな作業がストレスに感じてきましたので、後ろ姿をよく描いています。人物の表情によって伝えたいことはありません。

私は作品をできるだけ客観的に見せたいし、自分も客観的に見たいと思っています。描いている人物は自分だけど、自分ではない。自分の絵から自分の嗜好が出て欲しくない。これは人ではなく、あくまでも形。私の思い入れを挟むことなく形を選び、その形をもっともふさわしい場所に置くことに留意しています。

そして、見た人の感想、印象が作品そのものだと考えます。作品のどこをどう見せたいかではなく、見る人が好きに感じていただきたい。作品が呼び水となって受け手の思考を巡らせたり、全く関係のない事象を思い出したりしたら、それはとても素晴らしいことだと思います。

## アートをきっかけに、まちの魅力が想い出になる

静岡で作品を展示する当事者として、改めてこの地を歩き見渡すと、ふと記憶がよみがえってきます。静岡駅の床にしゃがみ込んだことや静岡アートギャラリー（2010年閉館）の床が絨毯張りだったこと、スパゲッティの名前「たらこクチビール」、とるに足りないことばかりです。

2017年のめぐるりアートのテーマは「まち・ひと・とき、むすぶ」。人が静岡をめぐります。作品と作品のあいだのつなぎめで、まちを歩いたり、電車に乗ったり、バスを待っていたりした何でもない経験の追憶にふけることになるかもしれない。些事を格別の思い出に昇華させるのは、作品に関わる行為の効能であると思います。

私は大江健三郎の小説を読んで、土地には力があると感じました。静岡のまちにも力があります。静岡にゆかりのある作家を選出し、作品を展示し、人にまちをめぐってもらう。めぐっている瞬間のみならず、すっかり忘れたあとにも鮮やかに蘇り、影響を与えてくれるまちの力、作品の力を期待します。

左から《さつき》2015、《蒲団》2014、《新聞》2013、《枯れ葉》2014、《江戸間》2012

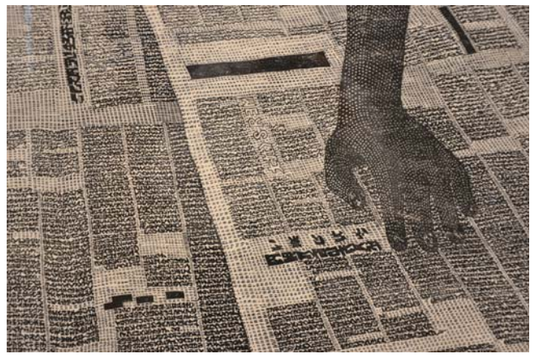
《浮き島》2014、《水仙》2015

2017/10.17(Tue)/11.5(Sun)

## 静岡市美術館

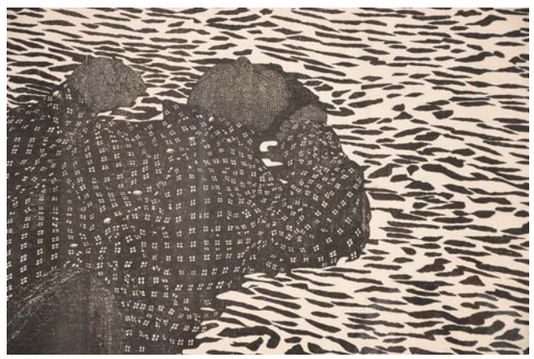
# 遠藤美香

静岡市美術館では、多目的室で版画家・遠藤美香の木版画作品8点を展示した。作家にとっても、代表作を一堂に並べる初めての機会となった。広いエントランスホールから続く多目的室は、美術館の「交流ゾーン」として、誰もがいつでも気軽に訪れることができる。壁面には手数の多い密度の高い大作が並び、静かに見入る人の姿が多く見られた。



《新聞》2013（部分）

《蒲団》2014（部分）



《浮き島》2014（部分）

《水仙》2015（部分）

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)

中勘助文学記念館

# 奈木和彦

美術家／藤枝市在住

1970年　島田市生まれ
1996年　東京学芸大学芸術課程美術専攻絵画選修 卒業

2012年　「Shizuoka Bremen Art Project」(Galerie der Hochschule für Künste Bremen／ドイツ)
2014年　「静岡アートドキュメント」(萬象寺／静岡)
2016年　「樂土の森 現代美術展」(樂土舎／静岡)
2017年　個展「なみあい新作展」(Gallery Art Kageyama 2F／静岡)

## 使われなくなった井戸

奈木和彦は、静岡を拠点に活動を展開している美術家である。ギャラリーでの個展を軸としながら、様々な企画展や場に関わってきた。表現形式は多岐にわたるが、やはり主要な作品群は絵画といえよう。鮮やかな「花」の絵、しかしそれは「絵とは何か、なぜ描くのか」といった問いかけでもある。画布は光沢のあるサテン生地。非配慮の配慮のようにシミが浮かぶ。そしてそこに「花」だけが描かれる。しかしなぜ「花」なのか、いたるところに問いがちりばめられている。

オブラートの作品群も見逃せない。薬を飲みやすくするための用品。デンプンで作られた繊細で儚い半透明の膜。ふとしたことで奈木は、油のしみたオブラートが役割を失うことで、名づけようもない無の表情を見せることに気づく。そのうえで、水と油を絡ませることで、フォルムや質感といった美術用語の枠を超えて、重層的な意味を派生させるモノにした。

第三の作品群は、特定の場所と深く結びつくアートへの志向である。本展での試みもその一つといえよう。羽鳥の地、昭和戦前期の民家、そして中勘助が仮寓し「杓子庵」と名づけた離れ。何よりも、『銀の匙』の小説家の記憶。

それらすべては「表現」を根源的に問いなおしつつ、「あらがえないもの」から生じる制約を反転し、作品を生みだす力に変えるしなやかな精神の運動といえよう。奈木は、改めて『銀の匙』を読み返し、「不自由に生きた」作者に共感をいだいたという。そこには、子供の心、そしてその目に映る情景が瑞々しい筆致で著されている。奈木にとっての「銀の匙」は生家の裏庭にあった古井戸である。その蓋の隙間から小さな石を落とすと、数秒たって響く水音から、不思議な高揚を感じたという。美術家、奈木は、「使われなくなった井戸」を随所に見だしているようだ。それらはそれぞれの物性と時間と空間をもち、さりげない行為によって自ら開き、「響く」。

白井嘉尚（静岡大学教授）



アーティスト・インタビュー

# 中勘助作品の必然のカタチ

## 見えないものに価値を見いだす

私は、学生の頃からずっとテーマにしているものがあります。それは、「虚像と実像の両義性」です。例えば、自分と庭の間にある窓ガラス。ガラスが映す外の光の虚像、自分の背景を映す虚像、その空間、隔たりを作品として実像にしています。水面に浮かぶ羽根があり、その実像に対し水面に映る実像、どちらからも見方があるのです。手法はさまざま、テンペラを使い何百層にも塗り重ねたり、サテンの生地を貼った画面に描いたり。それは、自分が大切にしているもの、表現したいものを伝えるためにいろいろなカタチの力を借りているに過ぎません。

関係、接点とか見えないものにこそ、人は価値を見いだします。私の場合、それが子どもの頃、生家の裏庭にあった大きな井戸。使われず、蓋がしてありましたが隙間があり、そこから石を投げ入れたとき「……ポチャン」と音がするまでの時間にときめきました。その時間が重力から解放される目に見えないからこその高揚感を表現したい。最近は、サテン地に花を描いていますが、花を観てもらいたいわけではなく、花が纏っているものを表現しています。

## 「あらがえないもの」と向き合う

作品をつくる過程において、「あらがえないもの」の存在を意識します。サテン生地をパネルに貼る際に生じる糊の刷毛跡は、自分ではコントロールができません。しかし、意図しないものを狙ったかのように成功に導くのが、自分の経験と技術です。偶然を必然に持って行く。というか、そもそも、必然しかないと思っています。そのために準備をして、種を蒔いておく。偶然を偶然で終わらせない、そのプロセスに意味があり、「あらがえないもの」と向き合っている方が必然に導ける。人とのつながりも、仕事もそうです。

## 中勘助の世界に誘う作品を

めぐるりアートでは、中勘助文学記念館が展示会場です。作品は5点を展示します。中勘助の作品を読んで、彼が背負ったものを表現したいと思いました。美しい言葉の中に、狂気的な側面を感じたのです。そして、厳しい兄が描かれていますが、兄からみたらまた違う景色が見えるのでは。そして、兄の存在は、勘助の作品には必然であったと。

縁側では鳥かごの作品を展示しています。鳥かごの中は不自由の象徴として描かれますが、果たしてそうでしょうか。鳥かごの中にこそ自由があるのかもしれない。視点を変えることで、それまで見えなかったものが見えてきます。

『銀の匙』の中で、勘助が「お星さまをみてたんです」と言うと、兄が「ばか。星って言え」と諌める場面がでてきます。厳しい兄ですが、彼もまた傷ついていたのではないか。白墨にオブラートを重ね、それを乾かすことでできるヒビに二人の傷ついたココロを映しました。偶然のようですが、必然のカタチです。

その他の作品もすべて勘助の文章からインスピレーションを受けました。繊細でデリケートな勘助のイメージをくずすことなく、勘助の世界に誘うことが私の作品の役割だと思っています。

《「星」と「お星様」》2017

2017/10.17(Tue)/11.5(Sun)

# 中勘助文学記念館
# 奈木和彦

中勘助文学記念館は『銀の匙』で知られる文学者、中勘助と静岡との縁を今に伝える施設です。昭和20年を前後して勘助が身をよせた農家の離れも当時の姿に復元されています。奈木和彦は、そのような場の記憶と特色そのものを、鮮やかな作品として提示しました。市の中心から離れた立地であり、会期中は荒天に見舞われたにもかかわらず、普段より多くの来場者が訪れ時間をかけて丁寧に作品を鑑賞している姿が印象的でした。

《匂い董のたね》2017

《提婆達多》2017

《月潮》2017

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)

村上開明堂七間町第2ビル

# 渡 辺 真 也

映像作家／沼津市在住

1980年　沼津市生まれ
2004年　ニューヨーク大学大学院シュタイナート教育学部修士課程 修了
2017年　国立ベルリン芸術大学造形学部 社会経済コミュニケーション学科博士課程 修了

2015年　映像作品「ユーラシアを探して」
2016年　映画「Soul Odyssey－ユーラシアを探して」

## ―（ハイフン）。つなぐもの

ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイク。この現代アートのスーパースターたちが目指したアートを媒介にした世界の統合。キュレーター渡辺真也は彼らの思想を引き継ぐように、一貫してこのテーマをキュレーションしてきた。「NATION」とは何か。「ASIA」と「EUROPE」をつなぐ大陸思想としての「EUR-ASIA」。この国や大陸という目に見えないものへの俯瞰的な眼差しは、本来渡辺に備わっていたものだろうが、大学卒業後にニューヨークへ移住し、院生としてキュレーションを学ぶことでその解像度が増していったのだと思われる。

その後、ベルリンに移り大学で教鞭を取る傍、自身の博士課程の研究を進めていった。テーマはもちろん「EUR-ASIA」である。10年以上に渡る海外生活によって渡辺は日本人であるのと同時に「アジア人」になったという。ヨーロッパの芸術都市で感じるアジア人としての私。その共感と違和感を抱えながら、研究の仕上げとしてユーラシア大陸を自らの足で横断する旅に出発する。ベルリンから故郷静岡まで13ヶ国を巡り文化の連続性を見つけ出そうという試みだ。その中で渡辺は興味深いひとつの仮説を生み出していった。

輪廻転生。渡辺はアジアに住む私たちに馴染みのあるこの仏教の教えが、ヨーロッパに伝わる英雄の旅に見られる円環の物語と親和性があることに注目した。そしてユーラシア大陸全土に広がる白鳥伝説がそれを象徴しているのではと探っていく。詳しくはこの成果が結実した映画『SOUL ODYSSEY－ユーラシアを探して』に譲るが、渡辺の目に見えないものへの眼差しは、より深く広い射程を獲得していることが見て取れる。豊かな想像力と構成力。キュレーターに欠かせない能力は、10年以上の経験を積むことによってさらに磨かれたのである。

現在、渡辺のその眼差しは奄美に向いている。ただしキュレーターとしてではなく、アーティストとして。ではこの変化はなんだろうか。乱暴な言い方をしてしまうと、それは事象への興味から人そのものへと興味が移り変わったことではないだろうか。渡辺は奄美シマ唄の唄者に出会ったことで、ひとまず「国」への愛を語ることから「人」への哀を語ることを選んでいるようにみえる。ただしこれによって彼の研究が滞ることはない。なぜなら奄美シマ唄を紐解くことで「EUR-ASIA」に繋がる回路を見出しているのだ。アプローチは違えど渡辺はアートを媒介に私／国の「なる」べき姿を提示し続けるだろう。

柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）



アーティスト・インタビュー

# 「なつかしや」の美学

## キュレーターとして社会性の強い展示を展開

今、私は表現者の立場にいますが、それまではキュレーターとして活動していました。実績として、20代の時にキュレーションした三つの国際展があります。一つ目は2005年8月15日、60回目の終戦記念日にニューヨークで展覧会「アナザー・エキスポ」（もう一つの万博）を開催。国民国家の枠組みの中で、取りこぼされてしまったせめぎ合いの地域、ユーゴスラビアと沖縄をテーマにしました。

二つ目が「アトミックサンシャインの中へ」。日本の戦後美術が憲法第九条のもとにあるという視点からとらえた展覧会です。日本国憲法の憲法制定に関わった女性、ベアテ・シロタ・ゴードンさんへのインタビューからつくっていきました。

三つ目がアイスランドと日本のミニマルアートの展覧会「ボルケーノ・ラヴァーズ」。日本もアイスランドもアニミズムが非常に強い国で、精霊信仰、自然、神様などの共通点があります。地球はアイスランドから割れて生まれて、静岡県はテクトニクプレートが3つ重なっていて、地球が死んでいく場所ともいえます。地球が生まれる場所と死ぬ場所をテーマに展覧会を実施しました。

## クリス・マルケル監督から「自分の作品をつくれ」

その私が、なぜ映像を撮ることになったか。私が最も影響を受けた映画が、クリス・マルケル監督の《Level Five》、沖縄の集団自決をテーマにしたSF映画です。この映画を沖縄で2009年に上映したのですが、私がベルリンで病気になった時、クリス・マルケル監督にどうしても会いたいとメールを送ったら「若さは何かができるということ。あなたは若いのだから自分の作品をつくりなさい」といわれました。その3週間後、監督は91歳の誕生日に亡くなりました。

自分でやるしかないと、初監督映画《ソウルオデッセイ》を制作し2016年に上映。もともとユーラシア研究をしていたこともあり、分断されたヨーロッパとアジアを一つの大陸文化「ユーラシア」として統一しようと試みました。ベルリンから故郷である静岡まで13カ国を横断し、文化の連続性を探る旅の記録映画です。

その映画を仕上げる過程で、運命的に奄美の島唄に出会いました。朝崎郁恵さんの曲を聴いたときに、神秘体験のように涙が止まらなくなったのです。さらに、島の人々の共感能力が非常に高く、私の視点に立って考えてくれる。個体が切り離されているのではなく、私とあなたがつながっている感覚がありました。それを私は、「情の美学」と呼んでいます。

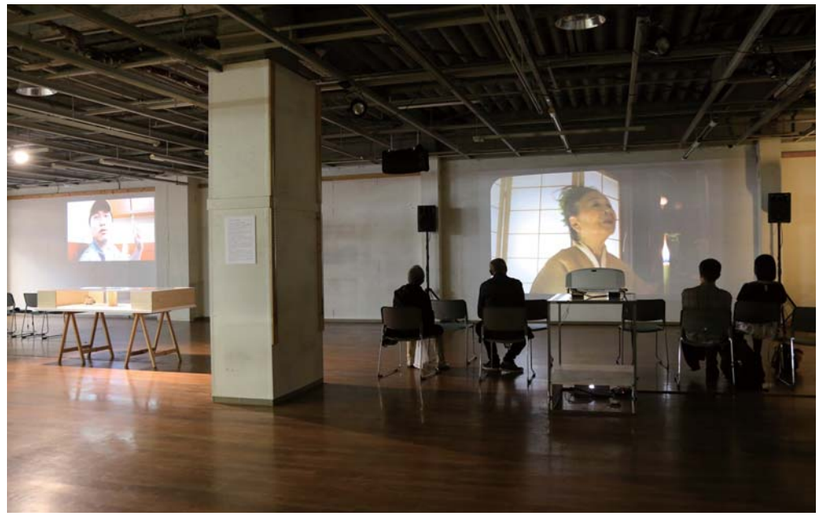
## 奄美と静岡、ユーラシアと静岡のつながりを上映

今回のめぐりアートでは、奄美と静岡、ユーラシアと静岡のつながりをテーマに、2作品を上映します。一つは《哀史奄美》。朝崎さんが歌う島唄は、個人個人に聞かせるもので録音はしていませんでした。それはもったいないから、後世に残そうとドキュメンタリーの手法をとった23分の短編です。朝崎さんがシャーマンになって、奄美の悲しい歴史を話すストーリーになっています。

そして、もう一本上映するのが《ユーラシアの音楽を探して》。これは、《ソウル・オデッセイ》を制作した際に、クラウドファンディングの特典者向けに編集したユーラシアの民俗音楽を集めたものです。どちらも若い人の心にどう響くのかを楽しみにしています。

奄美の最高の褒めことばは、「なてぃかしや」といいます。これは「なつかしや」に近い。魂の懐かしさを朝崎さんの歌に感じて、私は涙が止まらなかった。つきつめていくと、アニミズムが読み解けるのではないか。それこそ芸術がやるべきことだと思っています。

《朝崎郁恵「哀史奄美」》2017



《ユーラシアの音楽を探して》2014

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)
村上開明堂七間町第2ビル

# 渡辺真也

中心市街地の商店街にある広い空間を持った空き店舗を会場として映像作品２点とその資料を展示した。路面の1階という好立地であるため映像作品が外からも眺められ、通行人の興味を引くように展示構成を意識し、映像を白壁に直接映し出し、場の存在も生かすことを試みた。通りの喧騒とのコントラストが生まれ、鑑賞により集中できる環境が創りだされた。

朝崎郁恵による奄美の神唄と平家伝説の紹介文

## 中勘助文学記念館

10.22(日) アーティストトーク
奈木和彦

## 静岡市美術館

11.5(日) アーティストトーク
遠藤美香

## 村上開明堂七間町第2ビル

10.22(日) アーティストトーク
渡辺真也

10.20(金) まちかどコンサート

### 韓国芸能の伝統と今をむすぶ

市内各所で生演奏を楽しめる機会を毎月提供。今回は「朝鮮通信使」縁の都市、韓国・釜山市よりアーティストを招聘。

10.17(火)–11.5(日)

派生企画 **ななげい**
(七間町大学藝術学部)

藝術を媒介に日常生活の中で「学び」を発展、継続するプラットフォームを生み出すために実験的企画として「ななげい(七間町大学藝術学部)」を実施した。3週間で16の講座やイベントを行い、延べ366名の参加者があった。街中で開催できたことにより飛び入りやリピーターもあり、多様な人々のアクセスがみられた。

会期中は、各会場にて作家によるアーティストトークや、ワークショップ、派生企画のななげい、ライブペインティングが行われ、めぐるりアート静岡を盛り上げた。



## 東静岡アート&スポーツ/ヒロバ

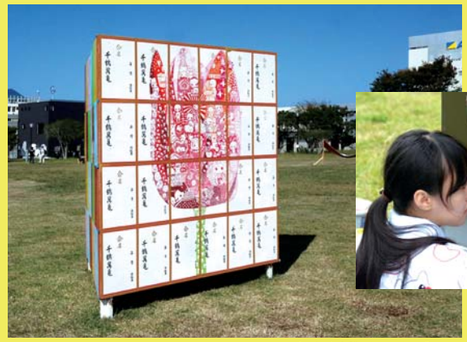
11.14(土) アーティストトーク
小笠原圭吾

10.14(土) 小笠原圭吾ワークショップ

### 作って、交換、カラフルりんご!

小笠原圭吾氏と静岡大学地域創造学環の学生が企画し、ペットボトルを素材にヒロバの木々を彩る「りんご」を作りました。

11.14(土) アーティストトーク
岩野勝人



《いちご・心臓・チューリップ》2017

11.14(土) アーティストトーク
千葉広一

9.23(土) 24(日) 30(土) 10.1(日) 14(土) 15(日) 11.11(土) 12(日) 25(土) 26(日) 12.9(土) 10(日)

### ありえだなおライブペインティング

9月下旬から12月上旬まで、ありえだなおがライブペインティング。かわいい絵には深い意味が、、、。

## 静岡県立美術館

10.21(土) アーティストトーク
池島康輔

11.19(日) 池島康輔ワークショップ

### 発泡スチロールで生き物の彫刻を作ろう!

発泡スチロールを材料に、「寄木造り」という技法を用いて、生き物の彫刻作品を作りました。大人11名、子ども8名の計19名が参加しました。

# 来場者の声

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

年々分かりやすい作品になっているように思いました。
親しみやすいアートになってきているように感じます。
学生

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

りんごを持って帰って、
自分たちも作品に参加できるのが
とても楽しかったし、喜びを感じた。
学生

村上開明堂七間町第2ビル

唄（土地ごとの）、人の声という音楽、とてもひかれる。
ユーラシア大陸の人びとの唄と島の唄との対比も良かった。

静岡県立美術館

すばらしい作品（作家）が多く、
知らなかったのがもったいないと感じた。
学生

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

どの作品もコンセプトが
しっかりしていて
心に来る物がありました。
CGデザイナー

静岡市美術館

モノクロ木版画の細部の
ディティールが素晴らしい。

中勘助文学記念館

会場と作品との調和を尊重した作品であった。「月潮」を少し時間をおいてから見ると、時間を越えた昔と今がつながったような不思議な感覚があって、ざわざわとしたおもしろさが湧いた。　学生

静岡県立美術館

木彫の立像は久しぶりに見ましたが、迫力があり、木の目が見えることも、木の歴史も像に取り込まれている気がして感動しました。「メメントモリ」の青年の手足の美しさ、動きを感じる時間、重心ののった右足と軽い左足の対比がとても豊かな人間の体の美しさ、動きを表していますね。唐草のデザインも生命の巡りを感じさせ力強さも感じました。頑張って作品づくりをしてください！！　主婦

静岡県立美術館

ロダンとともに作品が並び見ることができるなんて“すごい”と感動しました。「めぐるり」ならではですね。
パート

静岡県立美術館

ポスター、みんなのをみて、みんなすごいなと思った。
小学生

静岡市美術館

遠藤美香さんのどの作品も素晴らしく、特に芝生が好きです。
服のシワまでよく木版画で柔らかさが表現できていることに驚きです。
パート

中勘助文学記念館

中勘助の心の内側を垣間見た気がする作品に出逢えて嬉しかったです。　主婦

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ

心がほっこりする素敵な
空間（作品）でした。　医療職

村上開明堂七間町第2ビル

普段は観ないものなので新鮮でした。　会社員

静岡市美術館

静岡の町のみりょくや静岡そのものを知れる。
この美術展をきっかけにして、色々なつながりができている。
営業・販売

中勘助文学記念館

日常の中に組み込む作品展示の仕方は個人的にとても好きなので見に来て正解でした。「匂い菫のたね」が色合いが美しくて好きです。なかでも「月潮」は元からそこに存在しているものかのような雰囲気を漂わせていました。なので作者の方から説明を受けたとき衝撃をうけました。　学生

中勘助文学記念館

作家さんが、作品『銀の匙』を読みこんでいるのが、とても伝わってきました。私も、本を読んで、また改めて作品について考えてみたくなりました。　美術館職員

村上開明堂七間町第2ビル

ユニークでレベルが高くて、知的な楽しみがありました。



# 成果と課題

## 「めぐるりアート静岡」の全体について

植松篤（静岡県立美術館 主任学芸員）

私事ではあるが、昨夏静岡に移住し、初めて「めぐるりアート静岡」に関わった者として、率直な意見を述べたい。半年ばかりの実感ではあるが、静岡では、現役のアーティストが活躍できる場は多いとは言えず、こうした発表の場や鑑賞の機会があることは貴重である。しかしながら、会場は必ずしもアートのための展示空間ではなく、展示や運営上の難しさを伴う。あるいは、作品のコンセプト上、当館はロダン館での展示がふさわしかったが、既存作品の間に展示する難しさもあった。かと言って通常はこの企画のためだけに使える空間も限られている。毎回試行錯誤になるだろうが、ノウハウを蓄積しつつ継続し、これからも一人でも多くの来場者にアートに親しんでいただければと願っている。

## 美術館のポテンシャルを開く／様々な人と場を結ぶ

川谷承子（静岡県立美術館 上席学芸員）

2013年に「めぐるりアート静岡」がはじまってから、今回を含めて7名の現代作家が、県立美術館を会場に展示を行ってきた。毎回、出品作家と一緒に館内を一通り歩き、最もふさわしい展示場所を、作家の考えと美術館の意向を摺合せながら決めている。これまでにエントランスやロダン館で展示を行った作家達は、自らその空間で展示することを希望し、担当学芸員は、彼らの視点や、実際に展示された空間を通して、美術館の可能性を再発見した。これまでの展示を振り返ると、その空間で展示することが、美術館空間の再解釈につながっている、または、美術館の在り方、コレクションへの批評へも及んでいる時、成功したと感じることができる展示になっていたと思う。これから先も、「めぐるりアート静岡」を通して、様々な人と場を結び、美術館のポテンシャルを開いて行きたい。

## 「ななげい」の成果と課題

柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ 代表）

展示会場となった村上開明堂七間町第２ビルは静岡市の繁華街の中心にあることから、より不特定多数の方が来場する機会に恵まれた場所といえる。とはいえただ待つだけでなく、街中ゆえのアクセスのよさを利用し、来場の動機付けを積極的に行った。それが「ななげい（七間町大学藝術学部）をたちあげてみる」という派生企画の趣旨である。会期中ほぼ毎日ワークショップやトーク、音楽ライブなど多彩な企画を行うことで、多様な属性の方達を集めることができた。その姿は３週間限定ではあったが、普段の生活とは違う関係性を生み出せるサードプレイスとして機能していたのではないだろうか。あちこちで活発な言葉が交わされたことからも、アートはこのような場を活性化する術としても有効であることを再認識した。

## 「コンテナ・アートベース」の課題と展望

以倉新（静岡市美術館 学芸課長）

静岡市が「まちは劇場プロジェクト」の一環として整備を進めるヒロバを、本当にアートを使った「まちの中のサードプレース」とするために、岩野さんにお願いした「コンテナ・アートベース」プロジェクト。今年は春、秋ともに本当に雨にたたられた。野外の難しさである。しかし、なんとか2基のコンテナが設置され、シンボルの“キリン”も姿をあらわした。秘密基地としてアトリエ機能の整備はこれからである。雨で延期になった、作家によるコンテナを溶断しての窓や大扉の設置は2月に実施する予定で、春以降も作業テーブルや椅子の制作、工具の設置など整備を続けたい。そしていよいよ作家を招聘しての制作が始まる。楽しみにしたい。

## ヒロバの可能性（アート×スポーツ×学生×地域住民）

名倉達了（静岡大学 助教）

昨年度から本展の会場のひとつとなった「東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ」は、全国でも数少ない大型の屋内ローラースポーツ施設を有し、休日には多くの若者で賑わっている。一方で、幅広い年齢層の方々にとって憩いの場となる可能性はまだまだ多分にあるように思う。同地でフィールドワークに取り組む静岡大学地域創造学環の学生は、この可能性に向けた現地での聞き取り調査や、老若男女問わず参加できるアート・スポーツのコンテンツ作りを行っている。学生の柔軟な発想、地域住民の声、専門家の意見を踏まえて、ヒロバが地域の新たな文化交流の拠点となるよう努めていきたい。

## ワークショップなど、会期中のイベントについて

白井嘉尚（静岡大学 教授）

アートに触れることで物・事の見方や感じ方が更新される。見慣れたものが驚くべきものに変わる瞬間ともいえよう。それは作品の提示や鑑賞という形だけでなく、アーティストの言葉やワークショップ、目の前で制作している姿、また会場めぐりの途上でも起こりえるのではないだろうか。ヒロバと県美で開催されたワークショップ、ヒロバでのライブペインティング、全てのアーティストトーク、さらに村上開明堂七間町第２ビル会場での「まちかどコンサート」や「ななげい（七間町大学藝術学部）」はそのような意図で実施された。今後さらに、パフォーミングアーツとのコラボレーションや大学生や大人を対象としたワークショップなども追求してゆきたい。

展覧会

## めぐるりアート静岡　まち ひと とき、むすぶ

会　期：2017年10月17日～11月5日（ヒロバのみ10月14日～11月12日）
平成29年度 まちは劇場プロジェクト 東静岡アートプロジェクト事業
主　催：静岡大学、静岡県立美術館、静岡市美術館、静岡市、（公財）静岡市文化振興財団
協　賛：村上開明堂
協　力：オルタナティブスペース・スノドカフェ、株式会社CSA不動産
企　画：白井嘉尚（静岡大学教授）
以倉新（静岡市美術館学芸課長）
植松篤（静岡県立美術館主任学芸員）
川谷承子（静岡県立美術館上席学芸員）
名倉達了（静岡大学助教）
平野雅彦（静岡大学特任教授）
堀切正人（常葉大学准教授）
柚木康裕（オルタナティブスペース・スノドカフェ代表）
会　場：東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ（岩野勝人・千葉広一・小笠原圭吾）
静岡県立美術館（池島康輔）
静岡市美術館（遠藤美香）
中勘助文学記念館（奈木和彦）
村上開明堂七間町第２ビル（渡辺真也）
事務局：漆畑雅子（静岡大学）

記録集

## めぐるりアート静岡　まち ひと とき、むすぶ

発行日：2018年2月15日
編　集：企画者一同
写　真：遠藤幸廣（P7・P10上・P11右上・P11下・P14・P15・P30・P31）
加藤和夫（P18・P19・P22・P23・P26・P27）
千葉広一（P10下・P11左上）
デザイン：望月一弘（ジッカデザイン）
印　刷：松本印刷
発　行：国立法人 静岡大学 〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

### 東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ　2017.10.14（土）－11.12（日）

| | 作家名 | 作品名 | 制作年 | 技法、素材 |
|---|---|---|---|---|
| 01 | 岩野勝人 | コンテナアート・アートベース | 2017 | 貨物コンテナ（12ft、40ft）ほか |
| 02 | 岩野勝人 | キリン・キリン | 2017 | コンテナ壁、水性塗料 |
| 03 | 岩野勝人 | MENTAL CHAIR Ⅲ | 1995－2016 | 鉄、ウレタン塗料 |
| 04 | 岩野勝人 | MENTAL CHAIR Ⅳ | 1995－2016 | 鉄、ウレタン塗料 |
| 05 | 岩野勝人 | HUGE FOOT | 2005 | 鉄、ウレタン塗料 |
| 06 | 千葉広一 | 駅 | 2017 | |
| 07 | 千葉広一 | 駅前広場 | 2017 | |
| 08 | 小笠原圭吾 | pop dot project | 2011～ | 陶器、アクリル絵の具 |
| 09 | 小笠原圭吾 | 小さなりんごのドット柄 | 2015～ | 陶器、アクリル絵の具 |
| 10 | ありえだなお | いちご・心臓・チューリップ | 2017 | ライブペインティング、アクリル絵の具 |

### 静岡県立美術館　2017.10.17（火）－11.5（日）

| | 作家名 | 作品名 | 制作年 | 技法、素材 |
|---|---|---|---|---|
| 01 | 池島康輔 | ダーマ | 2010 | 木彫（樟） |
| 02 | 池島康輔 | 木花咲耶姫 | 2016 | 木彫（樟、桜） |
| 03 | 池島康輔 | 月喰 | 2014 | 木彫（樟） |
| 04 | 池島康輔 | メメント・モリ | 2010 | 木彫（樟） |
| 05 | 池島康輔 | 死肉貪獣 | 2014 | 木彫（樟） |
| 06 | 池島康輔 | 賤陋 | 2014 | 木彫（榧） |
| 07 | 池島康輔 | 鹸 | 2014 | 木彫（榧） |
| 08 | 池島康輔 | 屋台彫刻　正面御簾脇 | 2017 | 木彫（檜） |
| 09 | 池島康輔 | 屋台彫刻　正面脇障子 | 2017 | 木彫（檜） |

### 静岡市美術館　2017.10.17（火）－11.5（日）

| | 作家名 | 作品名 | 制作年 | 技法、素材 |
|---|---|---|---|---|
| 01 | 遠藤美香 | 江戸間 | 2012 | 木版画（和紙、墨） |
| 02 | 遠藤美香 | 芝生 | 2013 | 木版画（和紙、墨） |
| 03 | 遠藤美香 | 新聞 | 2013 | 木版画（和紙、墨） |
| 04 | 遠藤美香 | 枯れ葉 | 2014 | 木版画（和紙、墨） |
| 05 | 遠藤美香 | 浮き島 | 2014 | 木版画（和紙、墨） |
| 06 | 遠藤美香 | 蒲団 | 2014 | 木版画（和紙、墨） |
| 07 | 遠藤美香 | さつき | 2015 | 木版画（和紙、墨） |
| 08 | 遠藤美香 | 水仙 | 2015 | 木版画（和紙、墨） |

### 中勘助文学記念館　2017.10.17（火）－11.5（日）

| | 作家名 | 作品名 | 制作年 | 技法、素材 |
|---|---|---|---|---|
| 01 | 奈木和彦 | 月潮 | 2017 | 鉄・木・ウレタン塗装 |
| 02 | 奈木和彦 | 匂い菫のたね | 2017 | サテン生地・木製パネル・ジェッソ・ジェルメデイウム・クロムメッキ・ガラス容器・水溶液 |
| 03 | 奈木和彦 | 「星」と「お星様」 | 2017 | ダイヤモンドステンレス・真鍮 |
| 04 | 奈木和彦 | 冷たい石 | 2017 | 墨汁・白墨液・オブラート・ガラス時計皿 |
| 05 | 奈木和彦 | 提婆達多 | 2017 | 真鍮・鉄 |

### 村上開明堂七間町第２ビル　2017.10.17（火）－11.5（日）

| | 作家名 | 作品名 | 制作年 | 技法、素材 |
|---|---|---|---|---|
| 01 | 渡辺真也 | 朝崎郁恵「哀史奄美」 | 2017 | 4Kビデオ、ステレオ |
| 02 | 渡辺真也 | ユーラシアの音楽を探して | 2014 | フルHDビデオ、ステレオ |
| 03 | | 朝崎郁恵による奄美の神唄と平家伝説の紹介文 | 2017 | |

池島康輔
《死肉食獣》2014

小笠原圭吾《pop dot project》2017